

藤橋向山の塚

—新潟県柏崎市藤橋向山の塚発掘調査報告—

1986

柏崎市教育委員会

序

柏崎市南部に広がる丘陵地帯は、市街地の拡大とともに、開発行為が頻繁に行われている地域であります。この地域には、中位段丘が広く形成され、標高も比較的低く、また上部が平坦であることから、遺跡の立地条件としては整っているように考えられます。しかし、現状が山林ということもあって、遺跡の発見は極く限られたものとなっていました。

最近における市街地の都市化現象は、隣接地区の地価が高騰したり、乱雑な土地利用が行われる状況にあります。この中で、横山、藤橋、蛭井川、あるいは堀といった地区は、昭和58年に開通した北陸高速道の外側にあり、内側に比して開発行為の少ない地域であります。この地域に宅地を造成することは、地価の高騰を防止したり、かつ廉価な宅地を供給することが可能であると考えられます。(株)八木不動産商事は、向陽団地の造成を計画するに至り、遺跡の踏査を依頼されたのを契機として発見されたのが、向山の塚であります。この度の発掘調査は、この造成計画区域内にあって、計画上現状保存が困難であったことから、実施されたものであります。

柏崎市域には、塚(群)と称される遺跡が非常に多く発見され、新潟県内においても特異な存在となっています。しかし、塚造営の目的や、どういった人々が造営したのかなど、その実体や詳細な点については、ほとんどが不明という現状であります。今回の調査では、幾つかの知見は得られましたが、塚の全貌を解き明かすまでには至りませんでした。しかし、調査の成果を報告する本書が、研究者のみならず、広く一般の人々に活用され、塚(群)について、更に埋蔵文化財に対する理解が一段と深められるよう願っております。

なお、この発掘調査に当って、株式会社八木不動産商事並びに瑞穂商事の各位からは、発掘調査に対し、御理解と御協力を頂き、心から御礼申し上げます。また、新潟県教育委員会からは、御指導と御助言を賜わったこと、並びに発掘調査に参加頂いた地元藤橋地区の方々及び調査員の方に対し、深甚なる謝意を表します。

昭和61年3月

柏崎市教育委員会

教育長 山田恒義

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市大字藤橋字向山1353番地に所在した向山の塚の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、(株)八木不動産商事の計画した向陽団地造成事業に伴う緊急発掘調査であり、柏崎市が(株)八木不動産商事から受託し、柏崎市教育委員会が主体となって実施した。発掘調査現場作業は、昭和59年7月19日～同年8月11日まで延べ15日間にわたって実施し、整理、報告作業は、昭和60年9月10日から昭和61年3月31日に行った。発掘調査経費については、事業主である(株)八木不動産商事が負担した。
3. 発掘調査現場作業は、地元藤橋地区の有志から協力を頂いた。整理・報告作業は、担当の品田高志が全て行い、また報告書に係る図版等の作成や本文の執筆及び編集も行った。
4. 発掘調査による出土遺物は、一括して柏崎市教育委員会が保存・管理している。
5. 発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の諸機関等から御指導や御助言等を賜った。記して厚く御礼を申し上げる。

川又昌延、藤巻正信、新潟県教育庁文化行政課、柏崎市史編さん室、柏崎市立図書館、
(株)八木不動産商事、瑞穂商事

調　　査　　体　　制

調査主体　柏崎市教育委員会　(教育長　山田恒義)

| | | |
|------|-------|---------------|
| 總　括 | 丸田　昭三 | (社会教育課長) |
| 管　理 | 仲野　新一 | (　同　課長補佐) |
| | 佐原　勇男 | (　同　副参事) |
| | 小林　清輔 | (　同　社会教育係長) |
| 庶　務 | 阿部せつ子 | (　同　庶務係主査) |
| 調査担当 | 品田　高志 | (　同　社会教育係学芸員) |
| 調査員 | 阿部　正昭 | |

目 次

| | | |
|-------------------|--------------|--------|
| I 序 説 | 1 | |
| 1 発掘調査に至る経緯 | | |
| 2 発掘調査の経過 | | |
| 3 調査区の設定 | | |
| II 環 境 | 3 | |
| 1 地理的環境 | | |
| 2 歴史的環境 | | |
| III 向 山 の 塚 | 7 | |
| 1 立地と現状 | | |
| 2 形態と構造 | | |
| 1) 外部形態 | 2) 盛 土 | 3) 土 坑 |
| 4) 周 蔽 | 5) SD-1 溝状遺構 | |
| IV 遺 物 | 13 | |
| 1 中・近世の陶磁器類 | | |
| 2 その他の遺物 | | |
| V 考 察 | 14 | |
| 1 柏崎市域の塚（群）について | | |
| 2 向山の塚について | | |
| 1) 調査のまとめと築造工程 | | |
| 2) 築造目的等について | | |
| 3) まとめにかえて | | |
| 引用・参考文献 | 20 | |

図 版 目 次

- 図版 1 (1)向山の塚遠景 (周辺の地形) (2)向山の塚頂部からの景観
図版 2 (1)向山の塚現況 (2)向山の塚現況とクマスギ
図版 3 (1)③、④区発掘 (2)北東側周溝の発掘 (3)北西側周溝の発掘
図版 4 (1)向山の塚南北断面 (2)向山の塚基底部の検出
図版 5 (1)①区土層断面と土坑断面 (2)土坑完掘 (3)②区土層断面と基底部及び周溝の検出
図版 6 (1)向山の塚基底部 (2)向山の塚基底部
図版 7 (1)北東側周溝検出ピット (2)SD-1溝 (3)北東側周溝及びピット土層断面
 (4)南東側周溝及びSD-1溝土層断面
図版 8 出土遺物 (1)繩文土器 (2)石斧と硃 (3)フレーク (4)鉄滓 (SD-1溝出土)
 (5)塚盛土内出土陶磁器類

挿 図 目 次

- 第1図 グリッドの配置と発掘区 (1/400)
第2図 柏崎平野地形分類図 (1/200,000)
第3図 向山の塚と周辺の塚(群)及び城館跡 (1/50,000)
第4図 向山の塚位置と周辺の地形 (1/5,000)
第5図 向山の塚平面図 (1/80)
第6図 向山の塚土層断面凡例
第7図 向山の塚土層断面図 (1/50)
第8図 土坑平面図 (1/40)
第9図 遺物実測図 (1/3, 4/5)

I 序 説

1 発掘調査に至る経緯

向山の塚は、旧高田村藤橋地区の北600mに横たわる丘陵上に構築された単独の塚である。地元における塚に関する伝承ではなく、藤橋地区的庄屋であった春日家にも、塚に関する記録は、残されていなかった。但し、第二次世界大戦中から戦後まもない頃まで、塚周辺部も畠地として利用されていたとのことであり、塚の存在については、一部の人々に知られていたと考えられる。しかし、遺跡として周知化されることなく、現在に至っていた。

この藤橋地区を含む周辺の丘陵地帯は、昭和58年に開通した北陸高速道に象徴されるように、近年工業団地や宅地の造成等、開発行為が著しい地域であった。昭和58年、(株)八木不動産商事によって、藤橋、横山、輕井川の区域を対象とした宅地造成が計画された。計画地は、中位段丘の広がる良好な立地条件を具備しているにもかかわらず、遺跡分布の空白地域でもあった。このため、同社の依頼に基づき同年5月20日に現地踏査を実施したところ、遺物散布地は明確にできなかつたが、塚が1基存在することが確認された。この旨、事業主に対し回答し、取扱いの事前協議を行つたが、現状保存は設計上不可能とされたため、発掘調査を実施する方向付けがなされた。昭和58年10月4日付で、文化財保護法第57条の2に基づく事業計画が、事業主から提出され、文化庁長官宛に進呈した。これに対して、県教委は、10月21日付教文第815号により、工事着工前に発掘調査を実施する旨等が通知された。その後、八木不動産商事と市教委は協議を行い、昭和59年度発掘調査現場作業、昭和60年度整理・報告作業という事業計画の大綱を決定し、昭和59年7月17日、両者間により向山の塚発掘調査委託契約を締結した。同日、市教委は、文化財保護法第98条の2の通知を、文化庁長官宛に提出し、工期との関連で、7月18日から発掘調査に着手した。

2 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和59年7月18日から同8月7日までの延15日間実施し、調査面積は、周辺部も含めて172.25m²であった。

7月18日、器材を搬入し、現場休憩用テント設営や、プレハブ事務所を設置し、調査準備を行つた。また午後には、八木不動産商事と地元との連絡事務を担当する春日勇二氏宅へ赴き、作業員の雇用等について打合せを行う。19日は、杭打ちを行い、調査区の設定をし、塚及び周辺の地形測量を開始する。等高線は、塚の形態や周辺部の微地形を詳細に表現するため、塚頂部を起点に10cmコンターとした。塚の平面形は、方形を呈する可能性があると思われたが、盃掘坑もしくは崩壊と考えられる部分や、大杉の株が頂部に存在するなど、保存状態が決して良好とは言えないため、外見からは断定できなかった。20日には、地形測量も終了し、作業員の

参加による本調査の準備を行った。

7月23日、本日から作業員が参加。塚のお祓いを行い、発掘に着手する。先ず、塚盛土観察用のベルトを設定し、北西隅部から反時計回りに①～④区とした。また塚部（C-3グリッド）及びその周辺部巾2mの表土（腐葉土—第Ia層）の除去作業を実施する。しかし、古錢等の供養に関わる諸遺物は検出されなかった。発掘は、①、②区の盛土上層から開始した。25日、①、②区の発掘が概ね終了したので、午後から③、④区の発掘に着手した。26日もこれを継続したが、午後から雨となってぬかるむため、現場保存を考え急遽D-2グリッドに巾2mのトレーナーを設定し、周辺部調査に切り換えた。表土は浅く、遺構や遺物はほとんど出土しなかったが、

D-3杭付近から古銭残欠（寛永通宝？）が1点出土した。27日、③、④区の発掘を再開する。④区南北ベルト間にサブトレーナーを設定、地山と考えていた暗黄褐色土下に黒褐色土が堆積しており、周講の存在が確認された。

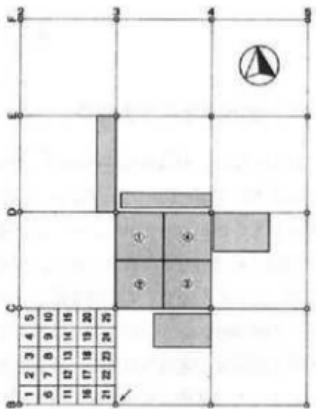
7月28日、昨日確認した周溝の発掘に着手、巾1m強、深度40cm前後と、かなり規模が大きいことが判明した。周溝の発掘は、29日、30日も継続し、31日にはほぼ完掘した。

8月2日、土層断面観察用ベルトの発掘に着手、また①、②区間のベルト中に検出されていた土坑の発掘も併行して実施した。3日、ベルト発掘を継続するとともに、頂部付近の切株除去作業を開始した。しかし、切株が大きすぎて、小型チェーンソー等の簡単な作業では切断することは無理であることが判明し、この除去は断念した。この日、①、②区間ベルト盛土中から、染付け陶磁器2片が出土した。4日には、切株を残し、塚を完掘した。

8月6日、塚基底部平面図の作成を行い、10cmセンターによる基底部及び周溝の微地形を測量する。また、周辺部の調査として、B-3、D-3、C-4の各グリッドを小区画して発掘を行い、7日に終了した。極少量の繩文土器や礫の他は遺構もなく、発掘調査現場作業の全てを終了した。

3 調査区の設定

調査区は、向山の塚が構築された丘陵部平坦部の南西部を起点とし、南から北へA、B、C……、西から東へ1、2、3……と10m区画のグリッドを設定した。更に周辺部からの遺構・遺物の検出に対応するため、2×2mの小グリッド25個を設定した。グリッドは、B-4⑧グリッド等と呼称することとした。また塚部分は、C-3グリッド内に全て収め、第1図のように、塚頂部を中心に4区画し、①区、②区……と呼称した。



第1図 グリッドの配置と発掘区（1/400）

II 環 境

1 地理的環境

柏崎平野は、鶴川と鈴石川及びその支流別山川等によって形成された臨海沖積平野である。海岸線には、柏崎・荒浜砂丘が形成され、古代においては河川が塞き止められ「鏡ヶ沖」と称される潟湖を形成したと言われている。柏崎駅南側一帯は標高の低い湿地帯であり、最近まであった佐藤ヶ池もその名残りと言われている。この平野は、北北東に延びる東頬城丘陵によって三方を囲まれる。河川によって幾つかに分割された丘陵は、刈羽三山と称され信仰対象にもなっている米山(993m)、黒姫山(890m)、八石山(517m)を頂点としている。

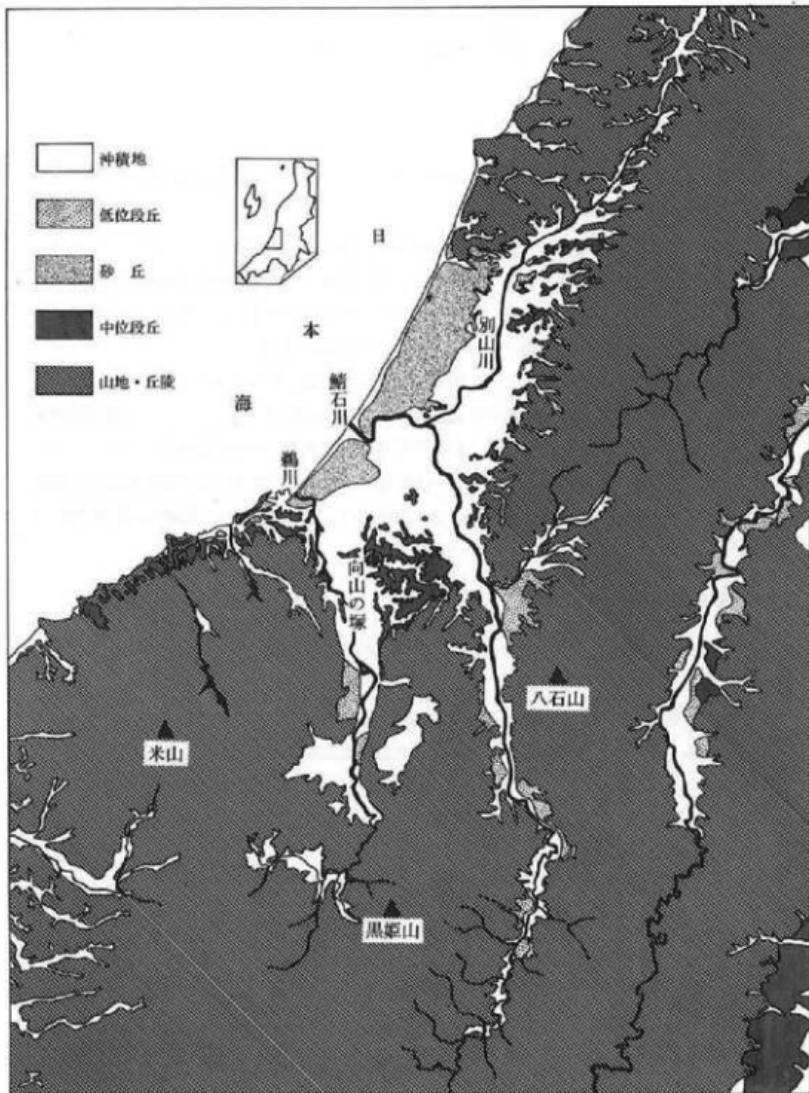
鶴川と鈴石川に挟まれた丘陵は、黒姫山を頂点としたのち、北に延びながら徐々に高度を下げ、沖積平野に没している。平野縁辺の丘陵には中位段丘が形成されているが、平野南部は最も発達した地域である。中位段丘は、その後の侵食によって多くの谷が樹枝状に刻まれ、その谷(沢)は沖積層によって覆われている。向山の塚は、谷によって刻まれた中位段丘上の細長い平坦部に構築されていた。塚の南西側には小谷があり、その開口方向には鶴川の流域平野(上方集落)と、米山が遠望できる(図版1-1)。

2 歴史的環境

現在の柏崎市・刈羽郡は、越後国七郡のひとつ三嶋郡に相当し、向山の塚が所在する旧高田村東部の藤橋地区周辺も、その内にあった。『倭名類聚抄』には、その郷名として「三嶋郷」、「高家郷」、「多岐郷」の3郷が記載されているが、各郷域については確証がなく、旧高田村がどの郷域に属するかは、明確でないのが実情である。また古代の交通路として、北陸道の問題が掲げられるが、これについても現在のところ定説がない。幾つかの仮説のうち、鏡ヶ沖南岸ルート説(新沢 1970)があり、これによれば横山—藤橋—軽井川等のルートは、中繼地として意義を有することとなる。

三嶋郡は、鎌倉時代にあっては郡制が廃れたため、各荘園名によって呼称されたが、室町時代になると、理由は不明であるが、「刈羽郡」と改称されている。荘園としては、佐橋荘、鶴川荘、比角荘等が存在したと言われているが、荘域等の詳細は不明である。このうち鶴川荘については、断片的史料から鶴川流域一带と鈴石川の安田下流左岸一帯の地が推定(金子達 1975)されており、藤橋地区もその内にあったと考えられる。鶴川荘は、「吾妻鏡」文治2年3月12日条に前斎院(領子内親王)御領と記されているが、他に史料がなく、またその後の変遷についても断片的であり、不明な点が多い。

中世も後半に至ると、全国的な戦乱の渦は、本地方をも席巻し、前後3回にわたって戦火に遇うことになる。それは、永正10(1513)年から翌年にかけての上条の乱と、享禄3(1530)



第2図 柏崎平野地形分類図 (1/200,000)



第3図 向山の塚と周辺の塚（群）及び城館跡（1/50,000）

向山の塚周辺に所在する中世・近世の遺跡地名表（第3図）

| No. | 遺跡名称 | 員数 | No. | 遺跡名称 | 員数 | No. | 遺跡名称 | 員数 |
|-----|---------|-----|-----|-----------------|-----|-----|------------|----|
| 1 | 半田塚群 | 8基 | 17 | 愛宕山の塚群 | 23基 | 32 | 光賢寺の宝鏡印塔 | |
| 2 | 半田一ツ塚群 | 2基 | 18 | 小島の塚群 | 10基 | 33 | 清龍寺の五輪塔 | |
| 3 | 向山の塚 | 単独 | 19 | イボ山の塚群 | 11基 | 34 | 飛岡大坪平の宝鏡印塔 | |
| 4 | 藤橋辻の塚群 | 6基 | 20 | 庚塚群 | 3基 | 35 | 周広院の五輪塔 | |
| 5 | 京ヶ峯塚 | 単独 | 21 | 国光の塚群 | 10基 | 36 | 柏崎陣屋跡 | |
| 6 | 三締寺の経塚 | 単独 | 22 | 神ノ倉塚 | 単独 | 37 | 琵琶島城跡 | |
| 7 | 十三本塚 | 11基 | 23 | 光賢寺の大塚 | 単独 | 38 | 黒滝城跡 | |
| 8 | 上軽井川経塚群 | 2基 | 24 | 久之木塚群 | 5基 | 39 | 上條城跡 | |
| 9 | 長者堀2号塚 | 1基 | 25 | 飛岡松葉の塚 | 2基 | 40 | 古町城跡 | |
| 10 | 長者堀塚 | 1基 | 26 | 飛岡神明神社 裏山の塚群 | 2基 | 41 | 安田城跡 | |
| 11 | 馬塚 | 単独 | | | | 42 | 北條城跡 | |
| 12 | 安田明神接塚 | 単独 | 27 | 十二神社の塚群 | 単独 | 43 | 北條館跡 | |
| 13 | 今熊の百塚 | 17基 | 28 | 風牧山の五輪塔 | | 44 | 南條館跡 | |
| 14 | 小坂の塚群 | 2基 | 29 | 堀の五輪塔 | | 45 | 加納城跡 | |
| 15 | 宮ノ入の塚群 | 3基 | 30 | 泉の五輪塔 | | 46 | 小番城跡 | |
| 16 | 七面塚群 | 5基 | 31 | 光賢寺の五輪塔 | | 47 | 善根城(八石山城)跡 | |

年から天文5（1536）年までの長期戦となった上条の再乱であり、また天正6（1578）年から翌天正7年にかけての御館の乱であった。前二者は、守護代長尾為景が越後征覇を遂げる過程において生じた守護上杉氏及びそれと関係の深い上條上杉氏（上條城）、宇佐美氏（琵琶島城）との戦であり、後者は上杉謙信病没後の跡目相続に絡む景勝と景虎の戦であった。これらの戦には、上條城（第3図38）を初めとして、琵琶島城（37）、北條城（42）、安田城（41）等が参戦して互いに争い、鵜川莊を中心とする一帯は、戦禍にみまわれ荒廃した。向山の塚が所在する台地の、安田城に対向する東側斜面には、火を振って合図した場所の名残りと考えられる「屁振坂」という小字名が残っており、この付近一帯も戦争区域内であったことが窺われる。

近世に至ると、旧高田村一帯は「刈羽郡鵜川庄上條郷」（『白川風土記』）と称されていたが、越後は小藩分立の時代を迎える、更に大名の配置転換が頻繁に実施されたため、刈羽郡内は諸藩の領地が入り乱れていた。向山の塚が所在した藤橋村は、一時的に長峰藩領や天領となつたが、長く高田藩の支配を受けた。しかし、宝永7（1710）年に松平越中守定重が桑名藩から高田藩に移封されて来るまで藩主は幾度となく交代していた。この後は、白河藩領、桑名藩領の飛地領となつたが、松平越中守の支配下のまま、明治維新を迎えたのである。

註 故品田定平氏が、生前に市内吉井黒川にある「屁振坂」について、このような解釈をしていたという（白井広治氏談）。

III 向山の塚

1 立地と現状

向山の塚は、柏崎市大字藤橋字向山1,353番地に所在し、黒姫山から北に派生する丘陵北部に形成された中位段丘上に立地する。この中位段丘は、柏崎平野周辺では最も発達した地域であるが、現在では無数の小谷によって樹枝状に刻まれている。これら小谷（沢）の中にあって、最も開析作用の著しかったのは、西流する軽井川流域で、東側では丘陵付近にまで至っている。柏崎平野南部の中位段丘地帯は、この軽井川によって南北に2分されるのである。

向山の塚は、この谷口を見下ろす北側の中位段丘平坦部に構築されていた。しかし、この平坦部の巾は狭いところで10数m、広くても70~80mであり、平均50m前後のわずかな面しか残存していない。塚は、東から延びた尾根状平坦部が、北東から南西に向って開口する小谷によって二又に分かれるが、その接点付近に位置していた。平面形が方形を呈する本塚の南辺は、この小谷に面し、その前方には鶴川流域や靈峯米山が望まれ、塚からの景観は比較的良好であった。しかし、伐採以前の現状は、高さ10数mのマツやスギ及び雑木が繁茂し、景観などは全く望むべきもなかった。塚築造当時の景観を復元することはできないが、現状に近かったとしたら、一般的に言われるような高所から集落を見下ろしたり、あるいは逆に見上げることは不可能に近かったと思われる。

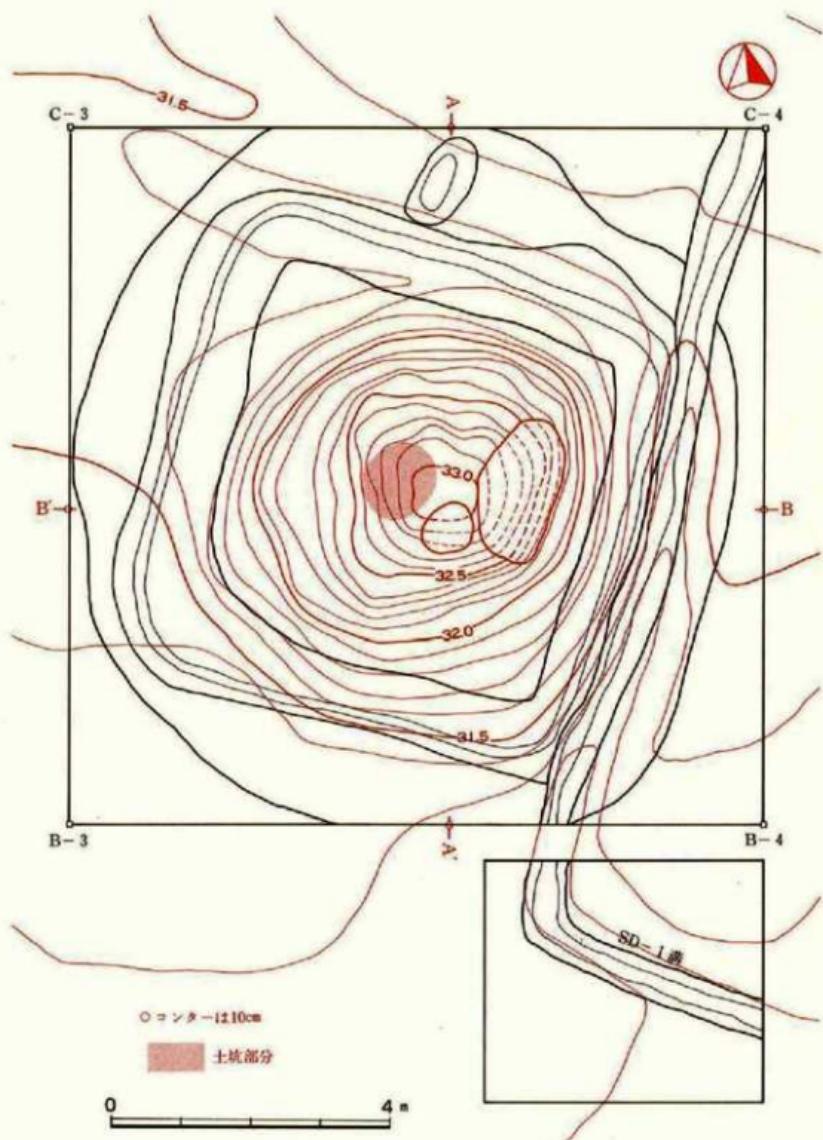
本塚周辺の半径1km内外には、東に下軽井川、南に藤橋、西に横山、北に希望が丘、朝日が丘の各集落が営まれている。このうち、北方の2ヶ所は、名称でも推されるように近年に造成された団地であり、本塚とは直接関係はないが、他の3集落は、中世末には確実に成立していた。更に塚の立地する台地部は、3集落の村境（大字界）が接するところで、塚はこの交点から50m前後西南西の藤橋地内に位置していたものである。

塚の外的形態は、スギの大切株や、頂部西側に盗掘痕とも思われる崩れたような形跡が認められるが、それでも高さは1.3m前後と比較的高いものであった。平面形態は、前述のように築造当時そのままの形態とは考えにくい面もあるが、直径7m程の円形形状を呈するかのように認められた。しかし、東側や北側には、辺あるいは面に見える部分もあって、方形の可能性もあるなど、調査前の外的観察では、その形態を判断することはできなかった。更に東側は、現状でも凹んだままで、完全に埋没していない溝があった。塚周辺は、第二次大戦前後に食糧確保のため、一時的な畠に開墾されたということであり、平面形態も変形させられた可能性が強く、保存状態は決して良好とは言えなかった。この他に塚に付属する施設として考えられるものに、周溝の存在が掲げられるが、調査以前の地表面観察では、その痕跡はほとんど認められなかった。

なお、藤橋地区では向山の塚に関わるような伝承及び記録は採集できなかった。



第4図 向山の塚位置と周辺の地形 (1/5,000)



第5図 向山の断面平面図 (1/80)

2 形態と構造

1) 外部形態

本塚の平面形態は、地山面において検出した基底部から、方形を呈することが確認され、その周囲を溝が巡るものであった。規模は、基底部上端（地山面）で一辺約5.22m、周溝底では一辺約6.70mを計る。南北の主軸線は、N-22.5°-Eを指向し、磁北に規制あるいは束縛されて築造されたとは考えられない。塚の頂部までの高さは、旧表土層から1.45mの盛土がなされていたもので、周溝底から約2.20mを計測する。塚盛土部分の断面形態は、東西線では半円状のカマボコ形を呈するが、南北線は直線的で、三角状を呈していた。前者の場合、杉の株や崩れたように変形した部分があり、等高線による測量図（第5図）でも各等高線が方形状を呈する場合が多い。盛土部分も全体としては方形状を呈し、南北線の断面形態が本来の形態であった可能性が強い。但し、等高線の方形は、南北軸をN-4°-W前後にとるものが多く、基底部の主軸線とは、かなりの誤差を生じている。塚の盛土形態は、後世において変形されたものと判断され、この問題については不明確と言わざるを得ない。

2) 盛 土

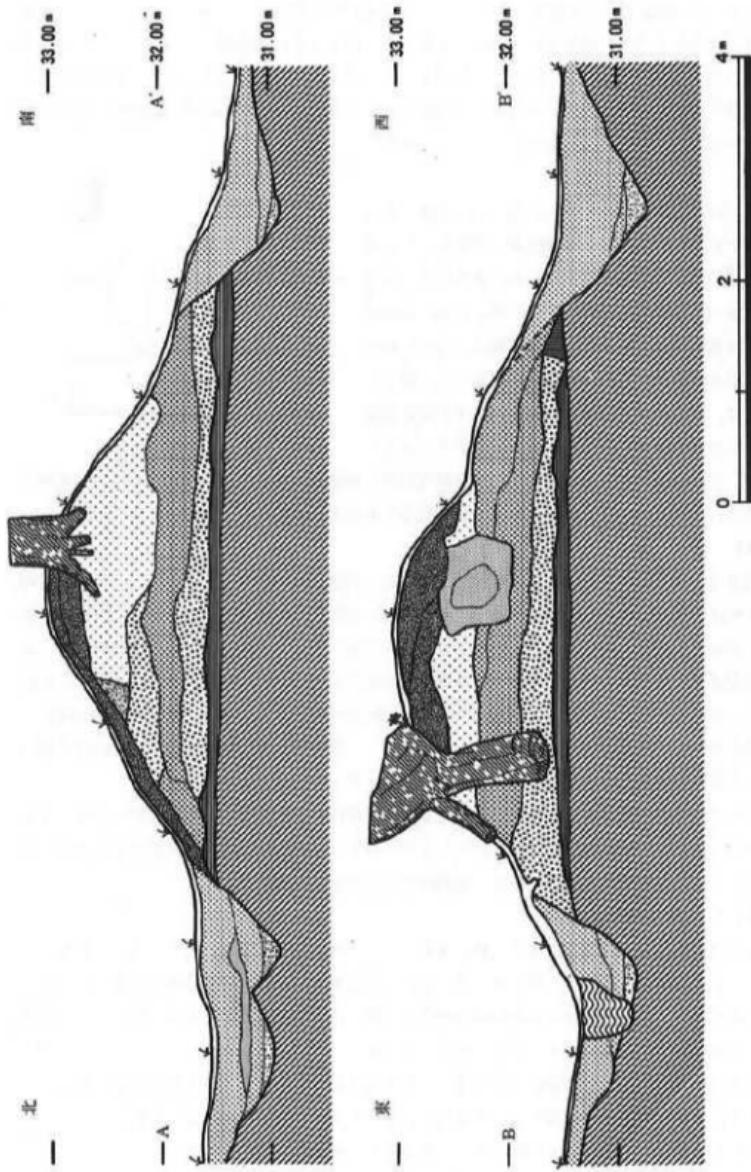
塚本体の盛土は、周辺部に堆積した第II層（旧表土：黒褐色土）と第III層（地山土：黄褐色土）が主に使用されている。特に後者は、周溝部の掘削土が使用されたと考えられる。この盛土層は、盛土の方法や土層観察から多くの層に分類することができるが、第II層と第III層の混合度等からa～eの5層に大別される。

第O_a層は、第II層が主体で黒褐色土が大半を占め、極少量の第III層が含まれる。上層は、比較的しまりがあるが、ブロック状を呈し、全体にボソボソであった。下層はややソフトである。本層は主に塚頂部に積まれている。第O_b層は、第II層を主体とし、第III層が含まれた明黒褐色土である。部分的な層であり、また表層面にあるためか、比較的しまりがある。第O_c層は、第III層を主体とするが、第II層も多く混合した暗黄灰褐色土である。比較的ソフトな層である。主に塚基底部の第II層上面を覆い、最初に盛土とされたものである。柏崎平野南部に広がる中位段丘では表土層が薄く、第II層と第III層が適度に混合する確率が高く、これを裏



第6図 向山の塚土層断面凡例

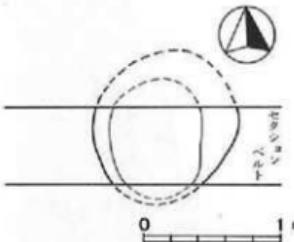
第7図 向山の家土壌断面図 (1/50)



付けている。第O_a層は、第Ⅲ層を主体とし、若干の第Ⅱ層が混合する明黄灰褐色土である。本層では、盛土を1回ずつ積んで行った行程が最もよく観察でき、第O_c層とともに塚本体下部を構成する層である。第O_e層は、ほとんど地山土のみで構成される黄褐色土である。第Ⅱ層を混合する確率の最も少ない周溝内の掘削土が利用されたと考えられ、この段階に周溝が構築されたことが窺える。しまりがあるが、ボソボソである。

3) 土 坑

本土坑は、平面的にもレベル的にも塚本体のはば中央に位置し、盛土上部の第O_c層（黄褐色土）上面から掘り込まれて構築されていた。平面形は、南北を長軸とする円形に近い椭円形と考えられ、長軸線はほぼ南北軸線と同じである。規模は、東西1.05m ×（南北1.10m）、深度は約65cmであった。覆土としては、明黒褐色土で充満されるが、中央部分には地山粒が多く混入し、自然堆積という状況にはなかつた。これらのことから、本址は何か有機質の物を埋設し、埋土された可能性がある。遺物としては、指頭大の小砾2個と、磨滅した土器小片1点が検出されたが、混入と考えられる。



第8図 土坑平面図 (1/40)

4) 周 溝

周溝は、調査前の現状観察からは、ほとんどその痕跡が認められなかったものである。外周の規模は、東西9.40m × 南北10.12mを計り、平面形は胴張りの隅丸長方形を呈する。巾は1.96 ~ 2.60m、平均約2.30mを計る。また深度も45~55cmであり、比較的大きな規模であった。断面の形態は、概ねV字形を呈するが、外側斜面は緩やかで、中央に至って急傾斜となり、2段になっている。周溝底の巾は、約10~20cmで、比較的直線である。また、高低差も10cm程度と誤差が少なく、計算されて構築された可能性が強い。覆土は、上層を明褐色土、下層は黄褐色系であり、塚盛土の崩壊土によって埋没したものと考えられる。

また北辺に当る周溝外縁の緩斜面には、平面形が椭円形で、長径1.36m × 短径0.76m、深度25cmの浅いビットが掘り凹められていた。このビットは、周溝内の覆土とは切り合い関係を確認できず、一連のものと判断される。遺物は出土しなかった。

5) SD-1溝状遺構

本址は、塚の東側を南北に走り、B-3②グリッド内で東へ折曲するものである。調査は、C-3グリッド内とB-3、D-3グリッドの一部を発掘したのみであるため、全体について不明である。巾は約30cm、深度約45cmを計る。覆土は、黒褐色土による單一層によって充満し、全体的にソフトでボソボソとしたものであった。

本址は、発掘前の地形測量図（第5図）にも表現されているように、上面は完全に埋没しておらず、また塚周溝覆土を掘り込んで構築されているため、時期的にはかなり新しいものと考えられる。遺物としては焼けた粘土塊と、鉄錠3点（図版8-4）が出土した。

IV 遺物

今回の発掘調査で得られた遺物は極めて少なく、特に向山の塚造営に係るものは全くなかつた。これは一般的な塚では普通であり、この点に塚の意味が隠されているのかも知れない。わずかに出土した遺物は、塚盛土内、塚土坑内、SD-1溝内、塚基底部及びその周辺の包含層出土遺物に区分することができる。また種別としては、縄文土器及び石器類、中・近世の陶磁器類、鉄滓や礫その他に分類される。本章では、塚築造時期にも関わる陶磁器類について述べたのち、縄文土器等の他遺物に触れることにする。

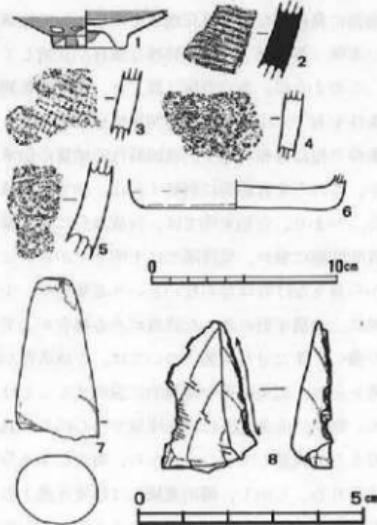
1 中・近世の陶磁器類

今回の調査で得られた中・近世の遺物は、いずれも小破片で、第9図1、2、及び図版8-i、jの4片のみであった。2は、中世の珠洲焼系陶器である。全体に著しい磨滅が認められ、破口もトロトロとなっている。盛土上層(O_a層)から出土したもので、黒褐色土を他所から搬入する際に混入した可能性が強い。1は、椀底部と考えられ、器形をある程度窺える唯一のものである。内外面に淡青白色の釉がハケ塗りされ、高台部はヘラによって削出される。17世紀～18世紀の唐津系と考えられるが、明確でない。i、jはともに碗と考えられるが、小片のためはっきりしない。薄手のiは内外面に、jは高台脇に染付けがなされ、時期的には18世紀頭のものと考えられる。釉はiが淡黄白色、jが白色を呈している。ともに盛土下部のO_c層から出土した。

2 その他の遺物

縄文時代の遺物は、極少量ではあるが、塚基底部第II層を中心に出土した。全体に磨滅が著しく、器面の縄文等を観察できないものが多い。6は、深鉢の底部で、底面に不鮮明な網代痕が部分的に認められる。中期か後期の所産と考えられるが、小片のため明確になし得ない。

SD-1溝内からは、3点の鉄滓小片(図版8-d～f)が出土した。向山の塚が所在する字向山の北隣りは、大字横山字金ヶ瀬であり、これに関連する可能性が強い。



第9図 遺物実測図 (1/3, 4/5)

V 考 察

1 柏崎市域の塚（群）について

柏崎市周辺は、県内でも最も塚（群）の集中する地域のひとつとして把握されていた（戸根 1979）が、昭和58年度に新潟県教育委員会が実施した遺跡分布調査によって、更に多くの塚が確認され、現在における塚総数は500基近くに達している。特に集中して分布するのは市内東南部の北条地区で、塚総数の6割にも及んでいる。これに対し、沿岸部や平野部及び米山山麓一帯の鶴川西岸域では、塚の分布はほとんど認められず、言わば空白地帯となっている。こうした塚（群）の分布傾向は、分布調査の密度にも原因があると考えられ、必ずしも事実を反映したものとは言えないが、現段階におけるひとつの特徴として把握される。鶴川右岸の藤橋地区は、近在の半田地区とともに塚分布の小地域であり、分布図の外殻に位置することになる。

これら塚（群）の立地としては、大半が丘陵の尾根筋先端付近や台地上に立地し、長岡市川袋の塚（寺崎 1981）や見附市三ツ塚（見附市教委 1984）のように沖積地、殊に水田内に立地する塚（群）はほとんど認められない。このうち最も多い事例は、馬の背状を呈した丘陵尾根筋あるいはその支尾根先端付近で、沖積平野に隣接した場所に構築されており、北条地区に所在する塚（群）のはほとんどが相当する。また、段丘上の平坦地に立地するものは、柏崎平野南部に発達した中位段丘地域を中心とし、地域が限定されることもあって類例は少ないが、十三本塚（第3図7）等の特殊な塚群が立地している。

このように、多くの塚（群）は、比較的景観のよい高台に立地することから、類似した立地条件を有する山城と有機的関連性を持つとする見解がある（戸根 前掲）。この論拠には、立地条件の他に分布形態や、戦国時代の感覚の伝承が多かったことなどが起因していると思われるが、これらを客観的に判断すれば、全てを山城と結合させて考える必要もないよう感じられる。つまり、立地条件では、何故高台に多く築造しなければならなかったのかは、塚自体の本質的問題に触れ、現段階では不明としか言いようがないが、その理由として展望がきき、他所から見えなければならないという必要性や、少ない耕地を避けたためなどが考えられている。更に、沖積平野に面した位置にある場合が大半であることから、集落等を意識していた可能性が強い。また分布形態については、立地条件が類似することから、視覚的に表された結果と考えられ、因果関係を積極的に説明することはできない。柏崎市周辺における塚の分布を見ても、確かに北条地区には北條城を中心にして鳥谷ノ城や広田城等があり、特に北條城下は城下町として発展していたことから、周辺に多く分布する塚と有機的関連性を有したかのように受け取れる。しかし、鶴川流域には越後守護上杉氏に深く関わる上條城や琵琶島城（平城）が所在するが、この地域は前述のようにほとんど塚の分布しない地域であって、塚との関係は認められないものである。更に、塚に付随した伝承にしても、それ自体は塚がどのような性質のもの

であるかを語ろうとするものであるが、それは今まで塚周辺で生活してきた人々が、塚をどう観念していたか、その感じ方を示すものであって、実際の説明とはならないのである（民俗学研究所編 1951）。

次に塚の存在形態について観ると、単独と群集の2つの形態があり、それぞれに意味をもつていて考えられる。柏崎市域で確認された塚（群）は、71件である。このうち単独で存在するのは27件〔38.0%〕で、群集形態（複数で構成されるもの）の塚群との比率は、およそ2：3の割合である。県内には単独の塚が多いと言われる（戸根 1974）が、本地域にはあまり当たるまらないように感じられる。群集形態の塚群は、構築された塚の員数によって区分することが可能である。今般に4段階に区分すると、小規模（2～4基）18件〔25.4%〕、中規模（5～10基）13件〔18.3%〕、大規模（11～30基）11件〔15.5%〕、特大規模（50基以上）2件〔2.8%〕となる。これらのうち3件以上のまとまりがあった員数ランクは、2基（11件）、3基（6件）、5基（5件）、8基（4件）、10基（3件）であった。^(註4)後世において一部の塚が破壊され、員数として計算されていないことも考慮する必要はあるが、塚群を構成する塚の基数は主にこの5例を中心であり、何らかの意味があったとも考えられる。但し、これが一般的なのか、本地域の特色なのかについては、対比すべき他地域の資料がなく、今後に期待したい。また地域の範囲も柏崎市域だけではなく、旧刈羽郡程度まで拡大する必要があると考えられ、更にデーターを増やして行きたい。

塚の平面形としては、不整三角形を呈した特殊な例（寺崎 1978）もあるが、大半は方形と円形である。しかし、以前にも指摘したことがある（品田 1983）が、最近の県内における塚基底部まで明確に調査した例では、その大半が方形を呈し、円形を呈するものは極稀な存在と言えるようである。分布調査で確認される塚は、現状が山林であることが多く、更に塚表土を厚く腐葉土が覆ったり、降雨その他によって形状が変化した場合が考えられ、円形と誤認されるケースが多いのではないだろうか。柏崎市内における塚（群）の発掘調査例は少ないが、国光の塚群（品田 前掲）例でも10基全てが方形となっている。^(註5)

以上、柏崎市域に確認されている塚（群）に対し、分布、立地、存在形態、平面形態の4点について述べてきた。しかし、この4点のみに限ってもこれで十分であるとは言い切れず、更に多くの諸問題について言及して行かなければ、塚（群）を理解することはできないであろう。今後の発掘調査に当っては、これら諸問題を見つめ、手懸りの少ない塚（群）に対し、少しでも多くのデーターを得るようにつとめたい。

註1 柏崎市域における遺跡数は、約600件余（但し、塚群中の各塚を1件として計数した場合）となるが、このうち塚は、約500基（83.3%）である。塚の地域別内訳は、最も集中する北条地区（長島川流域一帯）に約300基が集中して塚全体の62%を占め、圧倒的様相を呈する。これに次ぐ規模を有するのは、鶴川上流右岸の別所地区で、約120基前後が確認されている。これは、水上の塚群が市内最大規模の100基前後を保有することの結果である。この他には、平田、藤橋、安田、中船石（駒石川右岸部）、吉井、成沢等の各地区に10基前後から20基程度の小分布域が存在する。

註2 北条地区に塚（群）が多數確認されているのは、故品田定平氏の調査した結果であり、分布の精度とし

- てはかなり高いものと言える。この反対に、米山山麓から海岸に至る柏崎市西部は、昭和58年度の分布調査でも対象外とされていた。
- 註3 所謂十三塚と称される塚群は、比較的平坦な地を選んで築造されたようで、このため開墾や農地の区画整備等で消滅する場合が多かったと考えられる（日本常民文化研究所編 1984）。
- 註4 なお、員数が11基以上と規模が大きくなると、類例が乏しくなるため、数値的まとめはほとんど示していない。因に員数が10基以下で、1件の事例もない員数ランクは、7基と9基であり、逆説的意味があったのかも知れない。
- 註5 現在、塚の基底部を明確に検出した例は、20数例程が掲げられるが、それらはほとんど長岡市西部から柏崎に至る丘陵周辺に片寄っている。そのため、限られた地域の特色とも考えられるが、20数例のうち円形とされるのは、長岡市中山1号塚（藤巻・波田野 1979）と刈羽郡西山町孤山塚群1号塚（戸根・竹田 1979）の2例のみである。しかし、前者は円形と推定はしているが、平面形測量図からは方形状とも受けとることができ、また後者についても梢円形状を呈して、保存状態は良好でなかった。
- 註6 市内で正式に発掘調査が実施された塚（群）は、向山の塚のほかに、国光の塚群と半田の塚群がある。後者については、塚の形態を目的としているものであったが、実見した所見では方形塚がほとんどであり、測量図からもそれが窺える。

2 向山の塚について

向山の塚は、中位段丘上の平坦地に単独で築かれていた塚であった。しかし、塚に付属していたと考えられる遺物はなく、本塚を考察すべき手懸りは非常に少なかったと言える。本項では、先ず調査の結果をまとめ、築造目的等について推論を交えながら考察したい。

1) 調査のまとめと築造工程

向山の塚の平面形態は、方形を呈し、築造当初はかなり整った形態であったと考えられる。断面形は三角状もしくは半円形を呈し、台形とはならない。

塚の周囲を比較的規模の大きな周溝が巡り、周溝底における塚本体の規模は、一辺約6.70m、高さは約2.20mを計る。塚北辺の周溝外縁緩斜面において、中央からやや西寄りに浅いビットが存在し、覆土の観察から塚とは同時性を有するものと判断された。これは、国光の塚群10号塚でも類似したビットが検出されており（品田 1983）、築造目的に関連するか、何らかの祭祀等に使用された可能性もある。しかし、两者ともに遺物は出土しておらず、今後類例が増加することを期待したい。

更に、塚中央部に土坑状の遺構が検出されている。覆土は特徴的であり、有機物が埋設されるなどしたのち、腐蝕して消滅したような様相を呈している。人為的なものと判断されるが、古い木根の痕という可能性もあり、今回は指摘するのみとしたい。

次に盛土の状況等から、築造工程の一端を推定してみたい。先ず第1段階として、塚の場所を選定し、その周辺を含めて雜木等を除去し、塚の盛土範囲を区画したものと考えられる。第2段階は、塚盛土下部の築造である。塚区画外の周辺部から表土と地山土の混合土（偶然的混合土=O_c層）を区画内の表土上に平均となるように盛土する。次に同じ範囲か、それより若干広い範囲からO_d層を盛土する作業を行ったと考えられる。この時に「モッコ」等が使用されたと思われ、O_d層中にはその痕跡が顕著に観察される。第3段階は、周溝の掘削を行うもので、

その掘削土（O_e層）を利用して塚上部を形成する。しかし、掘削土全てを利用したものではないようである。そして、塚の中央部付近に土坑を掘り、何かを埋設したことが考えられる。第4段階は、塚頂部に黒褐色土（O_a層）を盛り、一応塚の外観的形態は完成したことになり、若干の整形等を行ったと考えられる。第5段階目として、塚頂部にスギを植え、周溝北辺に浅いビットを掘り凹めたと考えられる。第4段階に盛土した黒褐色土は、このスギを植えるための前工作であった可能性が強い。こうして完成した塚は、大きな凹みのように見える周溝の中央にそびえ、壯觀だったのではないだろうか。

この向山の塚を築造した時期は、同時性を有する遺物が出土しなかったことから、不明ではある。しかし、盛土中から出土した陶磁器片から、江戸時代中期以降に築造されたと考えられる。そして塚頂部のスギは、最底でも100年以上は経たものであるため、その下限は江戸時代後期と判断される。

2) 築造目的等について

向山の塚は、何の目的をもって造営されたのか、調査によってもこの問題を解く資料をほとんど得ることができなかった。しかし、だからと言って不明と簡単に処理してしまっては、意味のないことになってしまう。本塚を調査の結果から観ると、比較的企画性を有したもので、盛土や周溝掘削のために移動せられた土砂の量は、かなり多かったと考えられる。とすれば、1人や2人の作業ではなく、もっと人数を要しただろうことは、容易に理解される。このような作業を無意味にするはずではなく、ある必要性によって造営されたことが窺えるのである。本項では、塚を取り巻く諸属性を抽出しながら検討し、本塚を造営した意図について考察したい。

先ず最初に、向山の塚における立地条件や景観等から検討したい。本塚は、磁北等に左右されて設定された可能性が薄いことについては、外部形態の項で述べた。それでは、何かの対象があって、塚の正面あるいは裏面をその方角に向ける必要があったことが考えられる。塚の南西面方向には、小さな沢状の谷が、やはり南西に向かって開口している。そして、その方角には米山が位置し、本塚頂部から小谷を通して眺望することができる（図版1-2）。米山は、米山薬師とも称されて山頂には石塔等があり、本地方では広く信仰の対象となっている。このことから向山の塚は、米山の薬師信仰に関係し、純粋な信仰のために造営された可能性がある。しかし、薬師信仰にあたっては、塚を築くよりも石塔を設けるほうが一般的であり、本塚周辺からは、それに類するものは認められなかった。更に、信仰上何らかの供物（古銭等）があつたと考えられるが、それを示す資料は出土していない。また、本塚頂部から米山を望むことができたのは、周辺の木々を伐採した結果であり、築造当時の景観を復元できないにしても、無理であった可能性が強いだろう。以上のことから、現在の視点ではあるが、米山に関する薬師信仰に係るものとするには消極的にならざるを得ないと思われる。

それでは、次に向山の塚に立ち返って考察してみたい。本塚は、表層を腐葉土等で覆われ、更にスギや雜木が茂っていた。スギは、塚周辺にマツとともに比較的多く認められ、塚盛土上にも樹齢10~30年程のものが數本認められた。また、塚頂部のやや東側には、7回以上も伐採

された痕跡を残す大株があり、古い切口は既に腐蝕していた。このスギは、俗に「タマスギ」^(註7)と呼ばれるものであるという。普通のスギは、幹を切断されれば、そのまま枯れてしまうのに對し、このタマスギは根が強く、切株の一部から再生し、新たな幹を生成させるという。このため、何百年と生き抜け、また何かの原因によって幹が折れたり、あるいは切断されると、その都度株も大きくなり、形も異様となる。このスギの性質は、遺伝的なもので、1本のタマスギを識別できれば選択することは容易であり、社寺等に多く植えられている。確かに塚周辺には、所謂タマスギと称されるスギは皆無であり、本塚頂部に存在する1本のみであった。このタマスギは、意識的に本塚に植えられたものと考えられる。

また、向山の塚が位置する場所は、横山、軽井川、半田（100数十m程隔たる）、そして藤橋の4大字界が接するところであった。向山の塚が築造された年代は、江戸時代中期から後期に至る頃と推定したが、塚頂部にあったタマスギは、伐採関係者によれば樹齢200年前後だろうとされることから、およそ18世紀代が考えられる。この時期における支配領域を観ると、宝永7（1710）年以降では、横山、藤橋は高田藩に属したのに対し、軽井川、半田は幕領であった（新沢 1970）。

向山の塚は、タマスギを例にとっても明らかに自印を意図したと考えられ、更に大字界等が接することから、「標（しるし）」（波田野 1979）的意味をもった「境塚」^(註10)である可能性が最も強いと考えられる。以下、向山の塚を境塚と仮定し、その意義等に若干触れてみたい。

境あるいは境界は、時間的境界（通過儀礼等）と空間的境界（地理的なものなど）とに区分することができる。本項は、当然後者の考え方であるが、これも幾つかの段階に観念される。その第1は、生活圏の境であり、第2は家と外の境、第3は自分の身体と外界との境となり、境界意識には、この3段階が重層的に存在することになる（小泉 1985）。境塚を対象とした場合は、第1の境界意識ということになるが、これも幾段階かに区分することができる。向山の塚では、支配者階級等が意識した敵密な境界（行政区画等）と、藤橋地区を主体としたムラ境の2者が考えられる。

先ず前者について検討すると、鎌倉時代において下地中分が急速に増加し、領主と地頭との争いが生じたため、境塚を造営したという論があるということなどから（池田 1984）江戸時代と推定される本塚についても可能性を指摘できる。殊に、向山の塚が位置するところは、高田藩領と幕領とが互いに接し、しかも本塚が、藤橋地区にあって横山寄りであることから、両者がともに幕領を意識していたように考えられる。この場合、塚築造の主体者は、高田藩主等となり、命令された村人等がその作業に従事したことが想定される。とすれば、現在信仰等の脈絡や伝承が付随せずともよいわけである。しかし、領主等の命令等であれば何らかの文書等が残る可能性があるのに類例もなく、また領域境界の標とした場合、境界線上に塚を設定するのが妥当と考えられるが、本例は異っている。以上のことから、藩領対幕領的に理解することには無理があるようと考えられる。

それでは次に、後者のムラ境を意識して築造された場合について検討する。普通民俗学で言

うところのムラ境は、心理的なムラ境であり、必ずしも現実の大字界とは符合しないことが多い（民俗学研究所編 1951）。そして具体的には川、橋、峠、辻、三叉路等が生活圏における境として意識される。このような境には、「地蔵尊や馬頭観音、庚申塔、二十三夜塔などの石塔や、庚申塚などの塚のある場合も非常に多く、中でも道祖神を祀っている例が多い」（民俗学研究所編 前掲）という。向山の塚が位置するところは、普通に認識するムラ境よりも遠いというニュアンスが強い。しかし、この場所は横山から半田あるいは下軽井川に至る古道が通り、更に藤橋からその古道に接続する道とで三叉路を呈し、しかも地形的には峰に近い場所であった（第4図）。これらのことからムラ境のひとつと認識され、何らかの境界神が祀られていた可能性が考えられる。あるいは、タマスギはその神の宿る神木であったとも考えられる。但し、藤橋地区に伝承する残されておらず、また祭祀の痕跡を明確に検出できなかったことは、本論の展開に無理を伴っていると考えられる。しかし、塚を築くことはしたけれど、場所が集落から若干遠く、田畠も少ないことから早くに廃れてしまった可能性もあり、現段階における理解とすることはできるだろう。

註7 「タマスギ」については、向山の塚周辺の伐採を担当した関係者から教示を受けたもので、藤橋地区内では特別に意識していないかったようである。

註8 この「タマスギ」に疲れていた切口は、7ヶ所以上が認められ、樹齢20~30年前後のものであり、このスギの性質が話のとおりであれば、樹齢200年前後も根拠がないわけではない。

註9 宝永7(1710)年に松平定重が高田藩に移封された際に、横山、藤橋等は、高田藩の封に入った。この後寛保元(1741)年に松平定賢が白河藩に、また文政6(1823)年に松平定永が桑名藩に移封されて明治維新を迎えるが、各々飛地領として離縁され、松平越中守に支配され続けた。なお、今回は一括して高田藩と記した。また半田、輕井川は明治維新まで幕領であった。

註10 おそらく「境塚」と称しても、その目的あるいは内容と言ったことは多様であり、分類していく必要があると考えられる。しかし、現状ではそこまでには至っておらず明らかにすることはできない。

3まとめにかえて

向山の塚について、境塚のひとつと仮定し、その意味についても若干触れて考察した。しかし、これで向山の塚が理解できたことにはならず、ひとつの仮説が提示されたと言うべきであろう。塚（群）の研究は、発掘しても遺物を検出することは稀であったり、伝承や記録がない場合が多く研究する側にとっては厄介なものとなっている。このような現状をなるべく前進するようにと、考察したのであるが、やはり根拠の乏しいものとなってしまった。今後は新しい資料が増加するのを待ちながら、諸々の視点から検討して行きたい。

なお、塚研究は、特殊な塚に対するものが多いが、最近塚に関する論述が増えてきたようである。その中で、中村孝三郎氏による塚編年案が提示され（池田 1984）、大いなる一步を踏み出したように思われる。しかし、塚（群）の内容は、一元的に展開するというよりも、かなり多様性を含み、複雑ではないかと思われる。塚自体の発掘調査において、詳細なデーターを積み重ねて行くことが、もう少し必要のように感じられる。

〈引用・参考文献〉

- 池田 亨・山本 肇・金沢道範他 1982『竜ヶ池親音堂塚群緊急発掘調査報告書』 小千谷市教育委員会
- 池田 亨他 1983『竜ヶ池親音堂塚群発掘調査報告書II』(小千谷市文化財報告第2集) 小千谷市教育委員会
- 池田 亨 1984『新潟県の十三塚——地域研究の一事例——』『十三塚——現況調査編』(神奈川大学常民文化研究所調査報告第9集) 神奈川大学常民文化研究所
- 種岡嘉彰 1979『蛇山10号塚発掘調査報告書』『長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書〔I〕』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第18) 新潟県教育委員会
- 大場豊雄 1971『神道』『新版考古学講座 第8巻 特論(上)』
- 奥村秀雄 1971『経塚』『新版考古学講座 第8巻 特論(上)』
- 神奈川大学日本常民文化研究所編 1984『十三塚——現況調査編——』(神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第9集)
- 金子 達 1975『解題(毛利安田文書)』『影印北越中世文書』柏文房
- 金子 達 1976『胡羽部の莊・保』『かふくひむし』第21号 かふくひむしの会
- 金子祐男 1974『川治百塚と第6号塚の性格』『北越北線埋蔵文化財発掘調査報告書(川治百塚第6号塚)』(埋蔵文化財緊急調査報告書第2) 新潟県教育委員会
- 金子祐男・和田寿久 1976『地蔵塚発掘調査報告』『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第6) 新潟県教育委員会
- 金子祐男・竹田陽子 1978『蛇山7号塚発掘調査報告』『長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書〔II〕』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第13) 新潟県教育委員会
- 小泉 凡 1985『境界の神——日本人の病理観から——』『日本民俗学』159 日本民俗学会
- 小出義治 1978『小栗山不動院裏山経塚群——新潟県見附市小栗山不動院経塚発掘調査報告書——』見附市教育委員会
- 駒形敏朗・寺崎裕助 1978a『中山5号塚・座禅塚』『長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書』長岡市教育委員会
- 駒形敏朗・寺崎裕助 1978b『本村金塚』『埋蔵文化財調査報告書』七軒町遺跡発掘調査会
- 佐野賢治 1976『山中他界觀念の表出と虛空藏信仰——淨土觀の歴史民俗学の一試論——』『日本民俗学』108 日本民俗学会
- 畠田嵩志 1983『国光の塚群』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第3) 柏崎市教育委員会
- 新沢佳大 1970『柏崎編年史』上巻 柏崎市教育委員会
- 寺崎裕助 1981『川袋の塚発掘調査報告書』長岡市教育委員会
- 戸根孝八郎 1974『新潟県における塚について』『北越北線埋蔵文化財発掘調査報告書(川治百塚第6号塚)』(埋蔵文化財緊急調査報告書第2) 新潟県教育委員会
- 戸根孝八郎・竹田陽子 1978『孤山塚群』『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第17) 新潟県教育委員会
- 戸根孝八郎・北村 亮 1984『出雲崎百塚』『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第36) 新潟県教育委員会
- 中村幸三郎 1965『半田赤坂山墳塚群』柏崎市教育委員会
- 波田野至朗 1979『中山1号塚・2号塚のまとめ』『長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書〔III〕』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第18) 新潟県教育委員会
- 波田野至朗・北村 亮・黒須真次 1980『中山3号塚・中山4号塚・中山地蔵尊発掘調査報告』『長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書〔IV〕』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第22) 新潟県教育委員会
- 藤巻正信・波田野至朗 1979『中山1・2号塚発掘調査報告書』『長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書〔III〕』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第18) 新潟県教育委員会
- 松谷時太郎 1958『越後の経塚』『越佐研究』第13集
- 見附市教育委員会 1984『三ツ塚遺跡』
- 三宅敏之 1967『経塚』『日本の考古学Ⅳ』
- 民俗学研究所編 柳田國男監修 1951『民俗学辞典』



1. 向山の塚遠景（周辺の地形）

南西から



2. 向山の塚頂部からの景観

北東から



1. 向山の塚現況

北から



2. 向山の塚現況とクマスギ

東から



1. ③, ④区発掘

東から



2. 北東側周溝の発掘

北東から



3. 北西侧周溝の発掘

北東から



1. 向山の塚南北断面

西から



2. 向山の塚基底部の検出

北西から



1. ①区土層断面
と土坑断面

北西から



2. 土坑完掘

北から



3. ②区土層断面
と基底部及び
周溝の検出

西から



1. 向山の塚基底部

北西から



2. 向山の塚基底部

南西から



1. 北東側周溝検出ピット

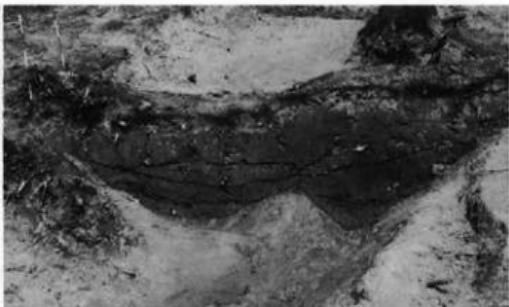
北西から

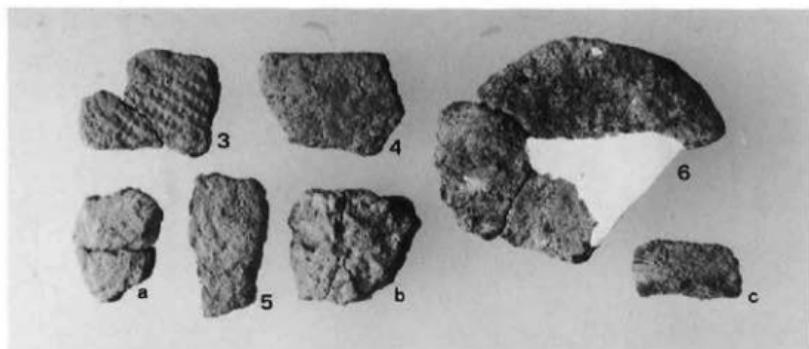


2. SD-I 溝

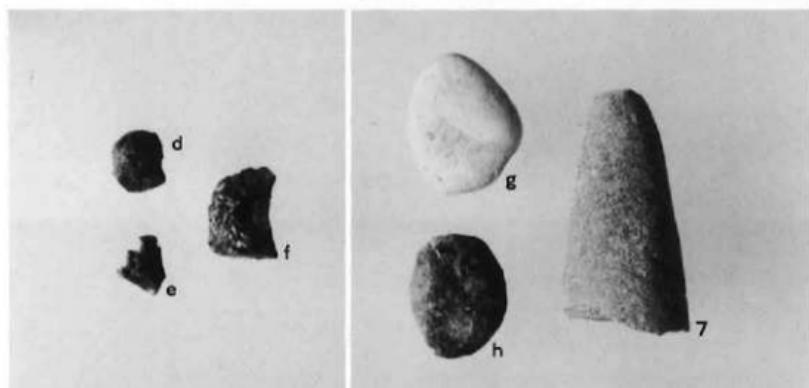
3. 北東側周溝及び
ピット土層断面

4. 南東側周溝及び
SD-I 溝土層断面



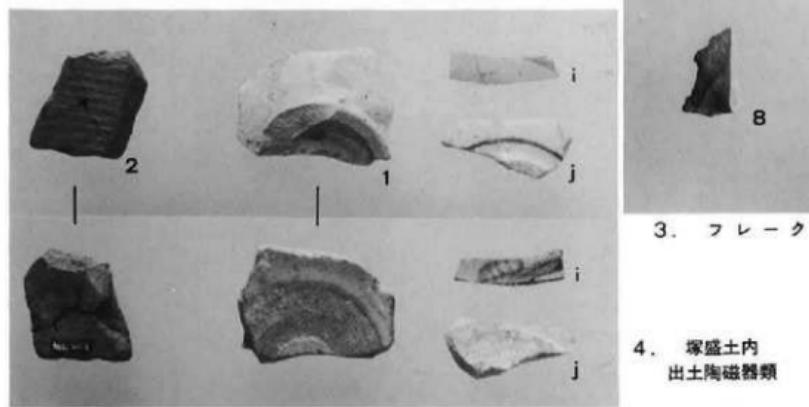


1. 繩文土器



4. 鉄津 (SD-I 溝出土)

2. 石斧と櫛



3. フレーグ

4. 塚盛土内
出土陶磁器類

出土遺物 (約1:2)

柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第6
藤橋向山の塚
—新潟県柏崎市藤橋向山の塚発掘調査報告—

昭和61年3月10日 印刷
昭和61年3月15日 発行

発行 柏崎市教育委員会
印刷 三秀社

新嘉坡總理
新嘉坡總理
新嘉坡總理

新嘉坡總理
新嘉坡總理
新嘉坡總理